

戦争の遺物とその移動がもたらしたもの

—— 日本軍特殊潜航艇シドニー湾攻撃のその後 ——

田 村 恵 子*

は じ め に

死は必ずすべてのものに訪れ、死とともに体は動きを止め、やがて朽ち果てる。死者は、もはや生者の世界に肉体的には存在しないが、生者にとっては完全に消え去った存在ではなく、いろいろな形でつながりを保ち続けている。この二者の関係は様々な様式をとりながらも、ほぼすべての文化に共通して存在していると言える。ところで、兵士の戦争における死は、普通に人が年老ったり病を得た結果の死とは異なった形の死であると考えられている。戦争では若者が家族から遠く離れた場所で死ぬ場合が多く、さらにその原因も戦傷や戦場での疾病という非日常的なものであり、さらにしばしば死の状況が暴力的であるからである¹⁾。

このような理由から、戦死は通常の死とは違った形で扱われ、さらに、戦死者にまつわる「モノ」に関しても、通常の死を迎えた者たちが残していったいわゆる「形見」とは違う扱いや意味づけがなされる場合が多い。戦死者が残していったモノは、「遺品」や「遺物」と呼ばれ、肉体が存在していた証拠の骨や灰も遺物に含まれる。遺品や遺物の英語は relic であるが、オーストラリアでも戦死者にまつわるモノに言及する際に使われている言葉である²⁾。本稿では太平洋戦争中にオーストラリアのシドニー湾を攻撃した日本軍特殊潜航艇にまつわる3点の遺物を取りあげて、それらが戦争中から戦後にかけてどのように二国間を移動し、その移動が日本とオーストラリアでどのように意味づけられたかを考察したい。

戦争の遺物に関する先行研究

戦死者慰霊に関しては、小泉政権下（2001年-2006年）の小泉首相の靖国神社参拝問題に刺

*たむらけいこ オーストラリア国立大学アジア太平洋学部

激されて、戦死者慰霊と国家の役割についての研究が多数発表されている³⁾。しかしこの論考においては、生者が死者である戦死者とどのような関係を持ち続けていくのかを、国家による戦死者慰霊を通してではなく、遺物に注目して考察していきたい。遺物を通して戦死者と生者のつながりを考える際に非常に重要なのは、戦後長年にわたって続けられてきた遺骨収集である。太平洋戦争の戦線が拡大し、日本軍の戦況が非常に厳しくなり、戦死者の遺体の迅速かつ適切な処理ができなくなった。特に、太平洋の島嶼地域で戦われた戦闘においては、1942年8月から翌年2月にかけてのガダルカナル戦以降、戦死者の遺骨を戦友が日本に持ち帰ることができなくなり、それ以外のもの、たとえば砂や石を「留魂砂」や、霊璽とよばれる紙を遺骨として読み替えるという作業が行われるようになった。(波平, 2004: 178) 一方、南方の島々に残された遺骨の収集は戦後始まり、国家事業として1953年から3次にわたって1975年まで行われてきた。規模は収縮したものの、近年でも遺骨収集作業は継続しており、硫黄島での収集を再開する計画もたてられている。(西村, 2008a: 79)⁴⁾ また、国家事業以外にも、民間団体や個人もこの収集に長年携わっている⁵⁾。

遺骨収集に関しての先行研究は少ないが、西村明と栗津賢太の研究は意欲的である。特に西村が論じるように、遺骨収集、そしてそれと平行して実施される戦地訪問によって、戦死者と生存者の間に存在する時間的及び空間的隔たりが小さくなり、あらためて二者の間の関係性が強まるのではないかという論考は非常に示唆に富む。(西村, 2008a)

本稿では、遺物と一般的に呼ばれる戦死者に関連するモノに注目したい。事例としてとりあげるのは、太平洋戦争初期の1942年5月31日から6月1日にかけて、日本海軍特殊潜航艇3隻がオーストラリアのシドニー湾を攻撃した結果、オーストラリアに残されたモノである。攻撃終了後、数多くのモノがオーストラリアに残ったが、最も大きなものは潜航艇の船体だった。この潜航艇の船体が、攻撃直後から現在まで豪国内でどのように展示されてきたかの変遷については筆者がすでに別稿で論じた⁶⁾。本稿では、まず第一に潜航艇から回収された日本人乗員の遺体の取り扱いと遺灰の日本返還について、第二に攻撃の際に日本海軍士官が携えていたと思われる軍刀、そして、最後に乗員の遺体から回収された千人針の3点の遺物に焦点を絞って、それぞれがどのように日本とオーストラリアの間を移動したかを記述し、遺物の移動に関わった日本とオーストラリアの人々の意思や反応について考察し、遺物にどのような意味づけがなされたかについて考えたい。

従来の遺骨収集に関する研究では、生者と死者の双方が日本人であり、放置された遺骨を太平洋の島々まで出向いて集める行為を通して、親族や同国人の関係にある戦死者と生者が、どのようなつながりを再生するかに研究の関心があった⁷⁾。本稿においては、生者には日本人だけではなく敵国人として戦ったオーストラリアの人々も含まれ、さらに遺物は、オーストラリアの管理下から日本の遺族に返還される必要があった。このように、敵国として戦った国と国と

の間を移動するモノは、受け取る側が「収集」をするのではなく、オーストラリアから日本に受け渡される形をとり、両国の当事者の意向や解釈がこのモノの移動に大きく関与してくる。特殊潜航艇にまつわる遺物の移動は、国際的なモノの移動の事例を検証するための貴重なデータを提供してくれる。

日本国内の戦死者慰霊・追悼に関するの研究と比べると、慰霊と追悼の観点から日本と海外の例を比較した研究は少ない。栗津賢太が、イギリスとアメリカにおける戦死者追悼を戦没記念施設を中心に考察し、関沢まゆみは、フランスの事例を取り上げて戦争と死の語りを論じた。（栗津、2004；関沢、2010）関沢は、フランスの語りと日本の語りを比較し、その違いをフランスの人々は個人主義に基づいた「硬い自我」を持っている反面、日本人は「以心伝心・阿吽の呼吸で互いにわかりあえるはずだ」という『柔らかな自我』を持っているからではないかという仮説を提出しているが、その実証研究が待たれる。（関沢、2010：179）一方、新谷尚紀は「慰霊」という日本文化に根ざした概念を外国語に翻訳する際に、たとえば「メモリアル」（memorial）と訳してしまつては、日本特有の意味合いが伝えられないので注意すべきだと指摘し、あえて、irei とローマ字で記載することでその文化的なコンテキストを伝えるべきであると主張している。（新谷、2009：189-190）確かに、日本語の語彙の持つ文化的意味の精査は重要であり、ある用語を安易に別の言語の単語に訳すべきではないが、このような概念を丹念に比較することで、相違点のみならず共通点を明らかにしていく作業が求められてくることであろう。

太平洋戦争初期の日本とオーストラリア

第二次世界大戦がヨーロッパで1939年9月に勃発すると、オーストラリアは英国の同盟国として連合軍に参加し、中東や北アフリカ・地中海方面へ派兵した。しかし、1941年12月の真珠湾攻撃によって対日戦争が始まり、自国の防衛が大きな課題となったオーストラリアは、空軍爆撃部隊を英国に残したほかは、ほとんどの将兵を呼び戻しアジア太平洋地域に投入した。しかし、国際連盟統治領として豪の管理下にあったニューブリテン島のラバウルを日本軍が1942年1月に占領し、「東洋のジブラルタル」として連合軍の極東防衛の要と考えられていたシンガポールが2月に、ABDA合同軍（米英蘭豪の四カ国によって太平洋戦争開戦直後に構成された合同軍）の一員として派兵をしていたジャワ島も3月に陥落すると、オーストラリアは苦境に立たされた。3月にフィリピンから退却したダグラス・マッカーサー米軍司令官が、7月にブリズベーンに設置された連合軍南西太平洋方面総司令官に任命され、オーストラリアはアメリカと共同戦線を張ることで、南進を続ける日本軍に対抗しようとした。しかし、豪政府も国民も日本の進撃をどこで食い止めることができるかに戦々恐々とした⁸⁾。

加えて、オーストラリアにとっての懸念は、それまでの各地の戦闘で日本軍に降伏し捕虜となった自軍の将兵たちを、日本軍がどのように処遇しているかについての確実な情報が入手できないことだった。シンガポールで1万5千人、ラバウルで約千人、そしてジャワ島、アンボン島、チモール島方面でも約6千人と、その総数は2万人を越えていた。日本は日露戦争や第一次世界大戦では国際法に準じた捕虜取り扱いをしたとして評価され、さらに開戦直後には、捕虜の取り扱いに関する国際条約であるジュネーブ条約を準用すると表明していた。(内海, 2005: 176-179) 太平洋戦争開始後の連合軍捕虜の処遇に関しては、断片的な情報は豪政府のもとに届いていたが、その内容は矛盾するものが多く、豪政府は日本軍の捕虜に対する姿勢と具体的な処遇を測りかねていた⁹⁾。

日本軍特殊潜航艇のシドニー湾攻撃

日本軍特殊潜航艇によるシドニー湾攻撃は、1942年5月31日夜半から6月1日の未明にかけておこった。日本海軍の甲標的型特殊潜航艇3隻が、湾内のガーデン島豪海軍基地の軍事目標を攻撃するのが目的だった。なお同日、マダガスカル島のディエゴ・スワレス港でも、2隻の特殊潜航艇が英国海軍の軍艦を攻撃している。この同時奇襲作戦の主目的は、実質的な戦果をあげるというよりも、予想もしなかった地点を攻撃することで、連合軍側に衝撃を与え危機感を高めるという点にあったと考えられる。甲標的型特殊潜航艇とは、2人乗りの小型潜水艦で、シドニー湾攻撃に参加した艇は、それぞれの艇長の名前をとって中馬（チュウマン）艇、松尾艇、伴（バン）艇と一般的に呼ばれる¹⁰⁾。

攻撃の概略は次のとおりである。潜航艇を搭載してトラック島の海軍基地を出発した母艦3隻を含む潜水艦船団が5月29日にシドニー湾の湾外に集結し、偵察飛行実施後、作戦開始を待っていた。5月31日の日没後、母艦から切り離されて最初に湾に到達した中馬艇は、湾の入り口に張られていた防潜網に引っかかってしまった。それから逃れようとしたが、スクリューが網に巻きついて身動きが取れなくなり、司令の中馬兼四と乗員の大森猛は、司令塔の前方に仕掛けられていた35キロの爆薬でできた自爆装置で艇を破壊し、艇内で死亡した。二番目に湾内に侵入した伴艇は、搭載していた2本の魚雷をガーデン島海軍基地に停泊していた米海軍の巡洋艦シカゴをめがけて発射したが、最初の魚雷は命中せずに岸壁に当たって爆発した。この衝撃で、近くに停泊していた豪海軍の宿舍用船舶のカタバル号が沈没し、水兵21名（豪兵19名と英兵2名）が死亡した。伴艇のもう一本の魚雷は岸に乗り上げ、不発に終わった。攻撃終了後、伴艇は湾外に脱出したが、その後行方不明になってしまった。この潜航艇がどこに沈んだのかが、長い間オーストラリアでは海洋ミステリーだったが、2006年11月にシドニーのアマチュア・ダイバーたちが、シドニー湾外から北へ20キロの海底に沈んでいるのを

戦争の遺物とその移動がもたらしたもの（田村）

発見した。司令の伴勝久と乗員の芦辺守一の遺体は艇内に残っていると考えられている¹¹⁾。一方、最後に湾内に入った松尾艇は、すでに日本軍の侵入に気づいていた豪海軍の爆雷攻撃を受けて、シドニー湾内にあるテイラー湾で沈められた。司令の松尾敬宇と乗員の都竹（ツヅク）正雄は艇内で拳銃自殺した。

潜航艇の引揚げ作業と遺体の回収

攻撃終了後、湾内で沈んだ中馬艇と松尾艇の2艇の潜航艇の引揚げ作業が豪海軍によって始まり、この様子は、連日オーストラリア国内の新聞が写真入りで詳しく報道して市民の関心と好奇心の的となった¹²⁾。引上げ作業は難航したが、ようやく6月5日に両艇が引揚げられた。中馬艇は自爆装置を作動させたので、司令塔の前方部分の鋼鉄板が内側から外に向かって大きく破裂し、艇の前方部分が完全に破壊されていた。松尾艇は爆雷攻撃を受けて沈んだため、その衝撃で艇外部の鋼鉄部分に多くの陥没がみられたうえ、引揚げ作業中に艇の後部が折れてしまった。

艇内からは4名の乗員の遺体が回収され、警察に移送されて検死作業が行われ、制服に縫い付けられていた名札をもとに、名前の確認作業が行われた。艇内からは、機材や装備、そして乗員の所有物が見つかり豪海軍によって回収されたが、無断で持ち出された場合もあったようである¹³⁾。中馬艇から見つかった軍刀は、キャンベラのジョン・カーティン連邦政府首相のもとに送られている。首相は軍刀を自ら手にとった後、戦利品として戦争記念館で保管するようにと指示した。潜航艇の船体は、シドニーで一般公開された後、1942年10月から翌年の3月にかけて、オーストラリア東南部各都市で巡回展示された後、キャンベラのオーストラリア戦争記念館に常設展示された。軍刀もシドニーで一般市民に公開されている¹⁴⁾。

日本人乗員の海軍葬

検死終了後、潜航艇乗員4名の遺体はシドニーの東部郊外霊園内の葬儀場へ移され、6月9日に海軍葬が挙行された。それぞれの遺体は日の丸で覆われた棺に納められて安置された。葬儀の出席者は、シドニー湾防衛司令官のミューアヘッドーグールド海軍少将と日本国の代理としてシドニーのスイス総領事ハンス・ヘディンガー氏のほかは、数名の新聞記者だけだったが、氏名不明の中年の女性も1名出席していた。ミューアヘッドーグールド少将の部下で主計将校だったジョン・バースタルは、少将から棺を覆えるだけの大きさの日本国旗を4枚捜すようにと命じられ、対日戦時下のシドニーで大変苦勞したという¹⁵⁾。葬儀場の外には、儀杖隊が整列し、弔銃隊がライフルで3発の空砲を発射した後、ラッパ手が葬送ラッパを吹奏した。

この葬儀の様子は、豪国営放送が録音し、日本に向けて放送している¹⁶⁾。その後、遺体は火葬され遺灰は壺に入れられ、しばらくはバースタルが保管していた¹⁷⁾。このように敵の軍人に対して軍が正式な葬儀をするのは、非常に例外的なことである¹⁸⁾。

特殊潜航艇日本人乗員の海軍葬が営まれる予定が豪国内の新聞で報道されると、いろいろな反応があり、葬儀に対して愛国主義的団体が反対の意向を示した¹⁹⁾。しかし、当時の豪国内の一般的な反応は、決して反対意見が大多数であったわけではない。まず、英国海軍の伝統を引き継ぐ豪海軍では、戦闘が終われば戦死者の取り扱いに敵も味方もなく丁重にするべきであると考えられており、少将自身も英国海軍から豪海軍に派遣されていた退官間近の軍人で、英国海軍の価値観を疑うことはなかったと考えられる。さらに海軍葬をすることを支持したのは、海軍関係者だけではなく、地元高級紙のシドニー・モーニング・ヘラルド紙は社説で葬儀の翌日に海軍葬を擁護している²⁰⁾。戦争の伝統とは、敵にも敬意を持って接し、戦闘終了後に礼儀にかなった葬儀を行うことであり、この伝統に対する抗議は、文明人としてのたしなみに欠けるものであると社説は論じたのだ。このように海軍葬の挙行は、当時のオーストラリアの海軍関係者や知識人層には十分納得のいく決定だったことがわかる。

6月下旬に、ミューアヘッドーグールド少将は海軍葬決定を国営ラジオ放送を使って豪国民に説明した。彼は、「彼ら（日本人乗員）の勇気は、ある国のみに限られた所有物でもなければ伝統でもない。われわれの国々の勇者たちにも、敵にも共通するものであり、戦争やその結果がどれほど悲惨であろうとも、認識され世界中で賛美される勇気である。彼らは最高の愛国者たちだった。彼らの千分の一の犠牲を払う準備がある者が、我々の中に幾人いるであろうか」と述べて、自国兵の持っている勇気と同等あるいはそれ以上の勇気を日本人乗員が持っていたと讃えている。このスピーチの内容は日本に向けても放送されており、豪国民に対する弁明だけでなく、日本に対するのプロパガンダ放送でもあったと考えられる²¹⁾。

遺灰の返還

4名の乗員の遺灰は、1942年8月にオーストラリアを出発した民間人抑留者の交換船に乗せられて日本に返還されることになり、駐豪日本代表の河相達夫公使が乗船した日豪交換船シティー・オブ・カンタベリー号の出航間際に遺灰が届けられた。河相は自室の一等船室内に祭壇を作り、そこに4人の遺灰を安置した。交換船は約800名の外交官や民間人を乗せてメルボルンを出発し、ポルトガル領ロレンソ・マルケス（現在のモザンビーク首都マプト）に到着した²²⁾。そこで遺灰は日本から到着した鎌倉丸に日本人乗客とともに移され、1942年10月8日に横浜に到着した。河相は日本船に移ると、祭壇を一等船客用のロビーに設置して遺灰を安置し、乗船者全員が参加して、慰霊祭を2度行っている。

特殊潜航艇乗員の遺灰が鎌倉丸で帰着するとの知らせを受けて、横浜では周到的な準備がなされていた。鎌倉丸は接岸前に、横浜港の沖合いで一晩停泊し、翌朝に待機していた乗員の家族と軍関係者がはしけで鎌倉丸に案内され、河相公使よりシドニー湾攻撃とその後の顛末に関しての説明を受けた。その説明の内容は、河相がメルボルンの公邸で拘禁中に新聞などから得た情報で、豪政府が特別に河相公使に情報を提供したわけではない。

鎌倉丸からまず最初に下船したのは、白布で包まれた遺灰が入った箱を首にかけた海軍軍人で、その後に遺族が続いた。波止場の両側には海軍少年隊や一般市民が出迎え、前を通過する遺灰に頭を下げて敬意を払った。この後、遺灰は横浜海軍鎮守府に移され、翌年に合同海軍葬が催されるまで安置されることとなった。横浜港まで出迎えに出た家族たちは、遺灰を持つことなくいったん故郷に帰った。

遺灰返還と互酬性

ここでなぜオーストラリアが遺灰の返還を決定したかを考えてみたい。前述した「勇敢に戦った敵への敬意」の表現だけではないと考える。まず、戦時下における日本軍人の海軍葬挙行には、必ず海軍と政府との協議があったはずである。海軍葬の実況録音と少将の弁明発言が国営放送をととして日本に向けて放送されており、政府の関与を裏付けている。さらに日本への情報伝達は、新聞などの文字媒体ではなく、即時的伝達性を持ち、臨場感のあるラジオ放送という音声媒体を使用したことにも、海軍葬にともなう処置に対日プロパガンダのねらいがうかがわれる。遺灰の日本返還決定は、このプロパガンダに更なる効果を求めたためであったのであろう。ここで、オーストラリアは、reciprocityつまり「互酬性」を期待していたと考えられる。マルセル・モースは贈与には社会集団同士をつなぐ重要な機能があり、贈られたら贈り返すという互酬性によって、集団が関係を保っていくのであると文化人類的研究である『贈与論』で論じている。この互酬性は現在でも国際外交の原則とみなされおり、ビザの発行条件の設定から外交官の追放まで、相手国が自国に行った処置と同じことを相手国にするというパターンが見られる。

前述したように、海軍葬と遺灰返還が実施された時点で豪側が非常に懸念していたのは日本軍による豪軍捕虜の扱いであるが、これに関連する矛盾する情報が交錯し、具体的な状況を豪政府は把握していなかった。海軍葬を挙行しただけでなく遺灰を返還することで、日本側に「貸し」を作ろうという意図があったと考えられる。つまり「貸し」を作ることで、自国の捕虜たちの処遇に日本が配慮をすることを期待していたのであろう。この互酬性への期待は、はっきりと言及されなかったものの、次のような表現がなされている。海軍葬の実況ナレーションでは、“... (Japan's) brave men in death are honoured as all brave men are honoured

throughout the world”（日本の勇敢な死者たちは世界中のすべての勇敢な者と同じように敬意を払われるのである）と語られた²³⁾。ミュアヘッドーグールド少将はラジオ放送の中で、「彼ら（日本人乗員）の勇氣は、ある国のみに限られた所有物でもなければ伝統でもありません。われわれの国々の勇者たちにも、敵にも共通するものであり、戦争やその結果がどれほど悲惨であろうとも、認識され世界の中で賛美される勇氣です」と語った²⁴⁾。ここで言及されたのは、敵国軍人が持っていた勇氣が、自国の軍人のものと違わないため、自国兵と同様の榮譽を敵国人に与えたということだった。死亡した対戦国の兵を自国兵と同様の扱いをするべきであるという観念は建前としては受け入れられても、相手国に対しての脅威と憎しみが高まる戦時下では抵抗なく実行に移すことは困難である。しかし、このような大原則に従った発言を日本に伝達することで、この「貸し」を公的なものとするねらいが豪政府側にあったと考えられる。ただ、これはあくまでもオーストラリアの戦史研究者、歴史研究者、そして元軍人の人々との討議の結果、筆者が出した妥当と考えられる推論である²⁵⁾。今後の課題は、この決定に至る政府記録が存在し公開されているかを確認することであるが、管見の限り見つかっていない。

特殊潜航艇乗員の海軍葬および遺灰の返還は特異な例で、その後二度と繰り返されることはなかった²⁶⁾。この一連の出来事は、捕虜処遇の情報が交錯し、正確な状況を把握できていなかった時期だからこそ起こったと考えられるが、1942年の後半になるとニューギニア各地での戦闘が激しくなり、豪捕虜の処遇に関しても次第に情報が入手されるようになった。殺すか殺されるかのジャングル戦は対日感情を厳しくし、さらに日本軍は捕虜をジュネーブ条約に基づいて扱っていないという状況も確認されだした。もはや戦局は互酬性や「貸し」を強調して相手側の態度の軟化を期待する段階を過ぎてしまったのである。

それでは「貸し」を作られた日本側の反応はどうだったのだろうか。ここでは、鎌倉丸を横浜に出迎え、翌日の読売報知紙の第一面に「仰ぎみたり神武の士魂」と題して寄稿した吉川英治の文を中心に考察する²⁷⁾。吉川は遺灰を返還したオーストラリアの礼節について言及する一方、日本軍人の勇敢さを強調して、次のように始める。「濠州にもいささかの文化性と武の何たるかを解するものはあった。いかなる人種といへどもつひに人間の真美と極致の聖武にたいしては、自己をあざむき得なかった」と、まずオーストラリアを見下し、続けてミュアヘッドーグールド少将に呼びかけた。「日本国民として、このたびのことは、お礼の意を表する。よろこびを歎びといふに日本臣民は決して卑屈ではない。しかしこの歎びは、敵国濠州のためによろこぶものである。否、世界人類のために祝福するの意を以てするものだ。なぜならば卿等は日本と戦ったために、日本の聖戦の意義を悟ったであらう」と。つまり吉川は、遺灰が返還されたことを喜ぶのは、オーストラリアによりやく日本の聖戦の意義を学ぶ機会をあたえることができうれしいからだと論じた。屁理屈としか形容の仕様がな論理だが、開戦後一年足らずで、初期の進撃と勝利の余韻がまだ残っていた日本の読者にとっては、吉川の高飛車な

物言いは非常に耳に快く響いたであろう。

吉川英治のこの記事は豪側がモニターし、その内容はミューヘッドー グールド少将を含む政府関係者に伝えられていた。しかし、その分析担当者は吉川の本意とする皮肉やあてこすりを理解していなかったようで、「日本国民として、このたびのことは、お礼の意を表する」の部分で文字通りにうけとり、「日本は遺灰の返還を感謝している」と報告し、その後続くオーストラリアを軽蔑した吉川の語調を汲み取らなかったようである²⁸⁾。

果たして、海軍葬と遺灰の返還は日本軍の捕虜取り扱いに、実際何らかの効果はあったのだろうか。ある豪捕虜が、オーストラリアの非常に礼節のある行いの見返りとして日本軍の監視兵から休日を一日与えられたという話が伝えられており、一連の行為が相互性の点で、まったく効果がなかったとは言えないものの、オーストラリアが期待したほど、日本軍の捕虜政策や捕虜の取り扱いに実質的な影響を与えることはなかった。

松尾敬宇の軍刀とその行方

返還された4名の乗員の遺灰は、横浜到着後、横須賀海軍鎮守府に安置され、12月には連合艦隊総司令官の山本五十六から戦勲を讃える賞状である感状が下され、翌年3月には乗員の二階級特進が発表された。4月に呉で海軍合同葬が行われた後、遺灰は故郷に持ち返られ、村葬や町葬が行われて、ようやく墓に葬られた。それぞれの乗員は故郷の英雄として讃えられ、彼らの生い立ちと武勇を讃える本も多く出版された²⁹⁾。この中でも松尾敬宇の名声が一番高まったのだった。

松尾敬宇は1917年に熊本県鹿本郡三玉村（現在の山鹿市）に生まれ、両親とも教育者の家の次男として育った。兄の自彊は父親と同じように教員になったが、敬宇は地元の鹿本中学を卒業後、江田島の海軍兵学校に入学し海軍士官となった。その後、特殊潜航艇の乗員に選ばれ、技術開発や作戦計画に関わりながら、攻撃要員としての訓練を積んでいる。開戦前には偽名を使って民間商船員になりすまし、太平洋航路を航海する龍田丸に乗り組んで、真珠湾の地形を偵察をしており、真珠湾攻撃の際には、潜水艦母艦にオブザーバーとして乗り組み、出撃した5隻の特殊潜航艇の戦闘を観察し報告する役目を与えられている。この攻撃では、潜航艇は実質的な成果を上げることができなかっただけでなく、無事に帰還した乗員は一人もいなかった。4隻は沈没し、1隻が座礁したが、座礁した潜航艇の司令だった酒巻和男が米軍に捕獲され、捕虜第一号となっている。（秦，1998：163-181）残りの9名の乗員は九軍神としてあがめられた。（山室，2007：268-299）

松尾自彊は遺灰の横浜到着時に一家を代表して熊本から迎えに出たが、公式儀式の終了後に熊本県主催の論文コンクールに弟の敬宇と菊池千本槍の関係について書いた作品が特別選考部

門で選ばれ、他の作品とともに『菊池精神発揚児童教本』に収録されて熊本県によって出版された³⁰⁾。「菊池精神」とは、菊池一族を輩出した熊本県山鹿地方の人々が持っていると言われた皇室を尊敬し、国のために尽くす信念を意味していた。「神霊」と題されたこの作品の中で、自彊は出撃前に、呉で弟に会った際のエピソードを記している。その時に、敬宇は父親の鶴彦から菊池千本槍の刀身を軍刀に仕立てたものを渡された。菊池千本槍は、南北朝時代に肥後の国の武将菊池武重が、南朝を支持して新田義貞の軍に従い箱根で足利勢と戦った際に、竹の先に短刀をくくりつけて、新型兵器としての槍を発案し実戦で使ったと伝えられている³¹⁾。地元の刀工の手による非常に鋭い刀身は、武器としての威力だけではなく、南北朝以来何百年もの間、菊池一族が皇室に忠誠を誓い貢献してきたことを象徴するシンボルであると地元では考えられていた。敬宇に千本槍の軍刀が欲しいと頼まれた父親は、それを持参して家族全員で呉へ面会に行ったのだ。父親が旅館の一室で渡した軍刀は、母親のまつ枝が嫁入りする際に締めていた丸帯の布地で縫った袋に納められていたという。敬宇がこの刀を持って潜航艇に乗り込み、出撃したことを自彊は確信していた。

遺灰の横浜到着時に自彊を含む遺族たちは、鎌倉丸の船内で河相達夫公使による報告会に出席したが、自彊はその内容を「神霊」の中で次のように記している。河相は豪側の報道に基づいて、攻撃のあらましや潜航艇の引揚げ作業、そして海軍葬について詳しく遺族に説明した。さらに、潜航艇の中から袋に包まれた物体が見つかり、最初は袋に入った日傘かと思ったが、それを開くと中から軍刀が出てきたとの豪新聞報道を紹介した際、これを聞いた自彊は、この軍刀は弟が持っていたものに違いないと直感したと書いている。加えて、河相が回収された潜航艇の一隻のハッチが少し開いていたことに言及し、ある雑誌に載っていたという一市民の証言を紹介して、その理由に納得したと語った。自彊は河相の紹介した記事の内容を次のように書いている。「……其の時、敵の特殊潜航艇が、突如この凄愴を極めた海面に浮び上った。煌々たる探照燈下にくっきりと照らし出されたのである。その艇には、司令塔を開けて半身を乗り出した悠々たる姿が、あざやかに見取れた。我が方は、その無謀にも等しい豪胆極まる態度に、しばし手の施す術も無く見守っていたが、やがて戦艦目がけて猛然と突進して来るのを見て、はじめてこれに集中砲火を浴びせ、やうやくにして撃沈したのであった」と。(松尾, 1943: 53-54)

河相達夫駐豪公使は横浜到着翌日の10月9日付で外務大臣谷正之宛に「シドニー特別攻撃隊員遺骨引取りニ関スル件」と題する報告書を提出している³²⁾。この中で、河相は攻撃、海軍葬、遺骨の引渡しの経過について豪海軍からの連絡やスイス総領事館とのやり取りなど詳しく報告するとともに、豪国内で報道された新聞記事やシドニー・モーニング・ヘラルド紙が撮影した海軍葬の写真を添付している。しかしこの報告書には河相が語ったとするハッチから半身を乗り出した日本軍人の姿を目撃したという証言を含んだ雑誌記事は含まれていない。さら

に、筆者の調査でもこれに相当する記事は当時の新聞記事などには見つからなかった。ところで、実際には特殊潜航艇のような小型の潜水艦は、攻撃中にハッチを開けることはできない。海水が艇内に入り込む恐れがあるからである。現実にはありえない情景をではあるが、勇壮な戦いの様子は、聞いたり読んだりする側の想像力を刺激し、後述するようにこのイメージはいろいろな形で再現される事になる。

一方、潜航艇内で袋に入って発見された軍刀は、河相がミュアヘッドーグールド少将に返還を要請したにもかかわらず、「博物館に保存するので」と返却を断られたと遺族に語り、外務省への報告書にも博物館、つまり戦争記念館に保存されることになったとの豪国内の関連新聞記事が添付されている。カーティン首相に見せるためにキャンベラに送られたと前述したこの軍刀は、実は最初に自爆した艇の司令の中馬兼四の所有物だったが、河相はそれを知る由は無かった。河相の説明を聞いた自彊は次のような感想を書いている。「聞き終わった私は、それは敵将が返さなかったものではなく、菊池の神霊がかえるを欲しられなかった（ママ）ものの様に思へてならなかった。恐らく菊池千本槍にこもったその神霊は濠州に御稜威の及ぶ日まで、赫々たる神威を敵に加へられてゐることであろう」と。（松尾、1943：55）このように、自彊は軍刀を生き物のようにとらえ、それに行爲主体（agency）を与え、シドニーまで運んで行った敬宇や返却を拒否したミュアヘッドーグールドの主体性と同じレベルの行爲主体が刀自体に存在し、刀が自分の意志と目的を持って、オーストラリアにとどまったと解釈している。

菊池一族の皇室への忠誠を象徴される菊池千本槍で作られた軍刀が、その末裔で特別攻撃隊員だった松尾によって携えられて敵国まで移動し、松尾が戦死した後もそこにとどまったのだというこの言説は、教本を通して山鹿地方だけではなく、熊本県内にも広く知られるようになった³³⁾。そしてやがて菊池寛の耳にも入った。菊池はすでに遺灰の横浜到着前に、「讃仰・四勇士の純忠ーこれぞ大義に徹した武士道」と題し論考を新聞紙上発表し、特殊潜航艇乗員を賞賛していた³⁴⁾。当時、菊池寛は国策映画会社だった大映の社長だったが、シドニー湾攻撃を題材とした映画制作を決定し、自らその脚本を書いた³⁵⁾。『菊池千本槍ーシドニー特別攻撃隊』と題されたこの映画は、千本槍が南北朝時代に誕生し、幕末では尊皇攘夷のために使われ、太平洋戦争のシドニー湾でも活躍し、皇室に忠誠を尽くすために使われてきたという3部オムニバス形式の大型作品だった。1944年10月に封切りになったこの作品では、第3部のシドニー湾攻撃のシーンを撮影するために、シドニー湾やハーバーブリッジを再現した大掛かりな模型をスタジオに作り、特殊撮影の技術を駆使して連合軍の軍艦に魚雷が命中して爆発するシーンが撮影された。松尾をモデルとした海軍士官役は、若き小林圭樹が演じ、彼のデビュー作となっている。

映画では、自彊が「神霊」の中で描いた攻撃シーンが忠実に再現され、菊池千本槍の伝説が銀幕上で映像として誕生した。敬宇をモデルとした主人公は、敵艦攻撃の際に潜水艦のハッチ

を開けて身を乗り出し、菊池千本槍の軍刀を高く掲げて突撃し、映画のシーンとしては勇壮で印象的であった。このシーンはその後も歴史的史実として語り継がれ、三島由紀夫も『行動学入門』の中で美しい行動様式として高く賛美している。(三島, 1974: 50)

前述したように、自彊が敬宇のものだと思い込んだ中馬兼四所有の軍刀は、現在でも戦争記念館に展示されている。戦後になって日本側から松尾の軍刀について戦争記念館にしばしば問い合わせがなされているが、その行方は定かではない。おそらく、艦内を調査した係員が港湾労働者が当局に無断で持ち出し、私物化したのであろう。同様に行方不明なのは、大映が制作した映画『菊池千本槍』のプリントである。この映画は戦争終了後、占領軍が売買、交換、上映を禁止し、すべてのプリントを没収するよう指示した「非民主的映画」のリストに含められている。(天川, 1996: 73-81)³⁶⁾ その後占領軍によって米国に持ち去られたかどうかは不明で、米国公文書館カタログでも残念ながら見つけることはできなかった。映画自体は行方不明であるが、松尾家には大映が映画制作をした際に贈呈した記念写真アルバムが大切に保存されており、そこに収められている映画のシーンのスティール写真から、内容を推察することができる³⁷⁾。

松尾敬宇の千人針とその返還

日本経済の復興が本格化してきた1950年代後半から1960年代にかけて、日豪間では経済界を中心とした交流が盛んになった。戦後の産業発展にとって不可欠な石炭と鉄鉱石を日本がオーストラリアから輸入し始めたのである。しかし、一般の日本人が観光客としてオーストラリアを訪れるようになるにはまだまだ程遠い時代だった。

その例外が山下武雄だった。山下は陸軍下士官として終戦をセレベス島で迎え、戦後は出身地の大阪に戻り警察官として勤務していたが、1959年に戦争中の回想記を『南十字星』として出版している。山下は大阪で開かれた見本市で豪政府代表団の一員として来日したオーストラリア人のヒュー・クラークと出会った。クラークは戦争中に豪陸軍兵としてシンガポールで日本軍の捕虜となり、タイ・ビルマ鉄道での強制労働を経て日本へ移送された経験を持っていた。意気投合した二人は、1944年にオーストラリアのカウラであった日本人捕虜の集団脱走事件についての本を共同で書く構想を練った。オーストラリアとそのようなつながりがあった山下は、自著の回想記をオーストラリア戦争記念館に寄贈し、館側から受領と寄贈感謝の手紙を受けとっていた。1963年10月に訪豪した山下は、戦争記念館を見学した後、当時の館長だったJ.J. マグラーズに表敬訪問をした。その際、山下は展示場で目に留まった千人針について館長に質問をした。Japanese body belt (日本の胴巻き) というラベルがつけられただけの展示物には詳しい解説はなかったが、佐伯という贈り主の名前が記されていた。館長が調べる

と、それは特殊潜航艇の内部から見つかったものだったことがわかった。山下は千人針の意味を説明し、もしそれが返還されるのならばどれほど遺族が喜ぶであろうかと強調した。山下の説明にマグラーズは同情的だったが、彼個人が返還するという決定をすぐに下すことはできないので、理事会に諮ると返事をした。

調査の結果、千人針は佐伯家に嫁いだ松尾敬宇の姉のふじえが贈ったものだったということがわかり、山下は戦争記念館で撮影した写真を熊本県山鹿の松尾の実家に送った。千人針は敬宇がシドニー湾攻撃の際に身につけていたため、血痕が残っていた。戦後、松尾家では不幸が続く、当主の鶴彦、長男の自強夫婦が相次いで亡くなり、敬宇の母のまつ枝が一人で4人の孫娘を育てていた。実家の人々は敬宇の遺品がオーストラリアにあることに驚くと共に、千人針が戻ってくると思い込んでしまったようで、地元の新聞がそのように報じ、さらには公開展示の計画も出された。一方、キャンベラではマグラーズが提案した千人針返還に対して理事会が反対した。理事会は、千人針返還が前例となり、将来同じような要請が出されることを懸念したのだった。その決定を受けて、マグラーズは山下に連絡を取り、松尾の実家には実物の代わりに写真を送り、遺族には千人針は記念館によって大切に扱われ、多くの人々が興味を持って見ていると伝えてほしいと頼んだ。

山下は松尾家の失望を和らげるために、マグラーズに直接松尾の母に手紙を書くように要請した。同意したマグラーズは、手紙に「あなたのご子息を含めた乗員の勇敢さが非常に高く評価された結果、海軍葬が催されたのです」と書いた。マグラーズは歴史的事実を指摘したわけであるが、地元ではシドニー湾攻撃乗員の勇敢さをオーストラリア人が20年以上経った後も忘れず顕彰していると理解した。

1965年にマグラーズ夫妻はアジア周遊のクルーズ旅行で、日本に寄港することになった。それを知った山下は、二人を山鹿に招待することを計画した。あいにくの悪天候にもかかわらず、夫妻は山下と熊本県選出の国会議員にともなわれて、飛行機とタクシーを乗り継いで山鹿まで到着し、町を挙げての盛大な歓迎を受けた。個人的な休暇旅行中のマグラーズ夫妻だが、山鹿の人々は豪国立機関の館長がオーストラリアを代表して公式訪問したように受け取った³⁸⁾。地元の名士が集まって公式レセプションが催され、松尾敬宇の墓参りも予定に組み込まれていた。山鹿訪問と墓参は、マグラーズ夫妻が千人針が返還されなかったことの謝罪と松尾敬宇に敬意を表する目的だったと地元では理解された。その後、夫妻は松尾家を訪れまつ枝と歓談し、母親は敬宇が好きだった地酒をオーストラリアに持ち帰り、キャンベラに展示されている潜航艇に注ぐようマグラーズに頼んだ。マグラーズは帰国後、戦争記念館を訪れた日本人学生の訪問団の参列の下、潜航艇の横で追悼式を行い、山鹿から持ち帰った日本酒を艇に注いでいる。

オーストラリアの新聞がこの式について書いた記事の中で、マグラーズの山鹿訪問について

触れ、「訪日中にマグラーズはベルト（千人針）の返還を頼まれたが、ベルトは通常の戦利品であるという理由で返還を拒否した」と報じた³⁹⁾。それに対して読者から投書があり、ある婦人は、「(この記事を読んで)多くのオーストラリア人が恥ずかしくて赤面しただろう。私は館長に対して、この女性に当然彼女のものであるそれ(千人針)を返すようにお願いしたい」と書いた⁴⁰⁾。戦争記念館も同じような手紙を別の婦人から館長宛に受け取っている⁴¹⁾。このように、戦争記念館の理事会とは異なる意見を、一般市民、特に女性が表明している点は注目できる。

マグラーズの山鹿訪問がきっかけとなって、松尾まつ枝の訪豪を実現させるためのカンパ運動が地元の山鹿や熊本を中心として始まり、熊本大学名誉教授の松本唯一が代表者となった。松本は地質学者で、ニュージーランドへ火山調査に行った際に、オーストラリアを訪れ、戦争記念館で松尾敬宇の千人針を見ている。松本は、敬宇が攻撃のときに身につけただけでなく、彼の血痕が残っている千人針をまつ枝に見せたいと願ってこの運動をすることにしたと語っている。寄付金集めは予想以上の結果をもたらし、周囲の熱意に説得されて、まつ枝は高齢にもかかわらず訪豪を決意した。

松本は、地元でのカンパ運動と平行して訪豪の手配も始めた。マグラーズの後任の W.R. ランカスター戦争記念館館長に連絡をとり、まつ枝一行を歓迎するとの手紙を送るよう依頼した。また元駐豪大使で日豪協会会長の鈴木九万（ただかつ）も、ランカスター館長に手紙を書き、訪問への助力を要請をした。この手紙の中で、鈴木は「このような巡礼は日豪の友好を促進していくために大変貢献できるはずである」と書いている⁴²⁾。このように、松本や地元支援者にとっては、母親が戦死した息子の遺品を見に行く目的の旅であるが、政府関係者は国家間の友好促進に貢献するであろうとの解釈を表明している。同じような展開は豪側でも見られた。松尾敬宇の母親の訪豪の可能性を知ったランカスター館長は、千人針の返還についてもう一度戦争記念館内の管理委員会にはかり、今度は返還の承認を得た。エドモンド・ヘリング委員長は館長に対して、「この方向性がとられたとすると、日本でオーストラリアに対するの多大な親善意識が生まれるだろうことは確かであろう」と書いている⁴³⁾。このようにまつ枝の訪豪と千人針の返還を通して豪側も国家間の友好の促進に注目し関心を持ち始めていたことがわかる。このように母と息子のつながりを再確認する行動が、国と国との友好に拡大解釈され、広義の政治外交的な意義付けがなされる過程がここに見られる。

松尾まつ枝の訪豪

訪豪1ヶ月前の1968年4月上旬頃から、松尾敬宇の母親の訪豪予定が豪国内の新聞で報道され始めた。豪国内では戦後も強い反日感情が残っていたが、まつ枝訪豪の発表に対して反対

はほとんどなかった⁴⁴⁾。

のぼりが立つほどの盛大な見送りを受けて山鹿を出発した一行は、1968年4月28日にシドニーに到着した。メンバーは、松尾まつ枝と介添え役の娘のふじえ、そして通訳として松本名誉教授も同行した。82歳のまつ枝は小柄な体を着物に包み、曲がった腰を支えるために杖をついていた。豪国内では一行の到着から離豪まで多くの報道陣が同行し、まつ枝の一挙一動を見守った。翌日には豪海軍が用意した小型ボートで、一行は松尾の潜航艇が沈んだテイラー湾に向かった。大きく揺れるボートの甲板に両側から支えられて立ったまつ枝は、自作の短歌「みんなみの海の勇士に捧げばやと　はるばる持ちしふるさとの花」を朗吟し、それを書いた色紙を自宅の庭に咲いていた花とともに海に投げ入れた後、敬宇が好んだ日本酒を海に注いだ。（木下、1976：88）この行動は、非常に興味深い。敬宇の潜航艇がそこで沈んだことは確かであるが、潜航艇も彼の遺体もすでに回収され、遺灰は日本に送り返され松尾家の墓に安置されている。それでも、この地点を訪れ上記のような式をしたのはやはり、戦死した場所には敬宇につながりがある霊あるいは魂が残っていると感じていたからであろう。沈没現場訪問の後、一行はシドニー市内中心部のマーティン・ブレイスにある戦没者記念碑を訪れ、潜航艇の攻撃で死亡した豪海軍の水兵を悼んで献花をしている。1963年の池田隼人首相（当時）の訪豪の際に、戦争記念館で戦没者記念碑に献花をすることが発表されると、ニュー・サウス・ウェールズ州の退役軍人会代表のW.エオが、そのような行為は見せかけだけにすぎないと非難したが、まつ枝一行に対する批判は出なかった⁴⁵⁾。

翌日、一行はシドニーからキャンベラに向かった。5月1日の午前中、まつ枝は国会議事堂でケリー海軍大臣とゴートン連邦政府首相と面会した。ゴートン首相は、まつ枝を駐豪日本大使とともに首相執務室へ招き入れ歓談した。非常に長身のゴートン首相が、彼の半分かくらいの背丈しかないまつ枝を包み込むように抱擁する写真から、面会が非常に和気藹々として暖かいものだったことが伝わってくる。

首相との面会后、一行はオーストラリアの報道陣が待ち構える戦争記念館に移動した。まず、屋外に展示されている潜航艇を館長の案内で見学したが、まつ枝は杖をつきながら潜航艇の周りを歩き、艇内を覗いたり、潜航艇の鋼鉄板を手で触ってその感触を確かめているようだった。敬宇の姉のふじえが涙をこらえることができず、ハンカチで始終目を押さえているのと同様に、まつ枝はじっくりと潜航艇を見てその様子をしっかりと記憶しようとするかのように見えた。このときの感想をまつ枝は次のように歌に詠んでいる。「愛艇に四つの魂生きいきて　父を呼ぶこゑ母を呼ぶ声」と。（木下、1976：94）潜航艇見学後、一行は館長室に案内され、ランカスター館長から額に入れられた千人針が手渡されると、それまで落ち着いているように見えていたまつ枝の手が震え、それをしっかりと両手で握ると額をひたいにあてるように持ち、館長に対して深くお辞儀をした。その様子は感動的で、息子の遺品を26年ぶりに手にした母親の感

情の高まりを表していた⁴⁶⁾。

まつ枝一行の訪問に対するオーストラリアの一般市民の反応は非常に暖かかった。まだ強い反日感情が残っていたオーストラリアで、まつ枝たちは自分たちの訪問がどう受け入れられるかを出発まで懸念していたが、その心配はすっかり吹き飛んでしまった。新聞各紙が写真入で一行の動きを報道し、杖をついた着物姿のまつ枝は彼女の微笑とともに人気者となった。一方日本でもまつ枝の訪豪と千人針の返還は大きなニュースとなり、新聞やテレビで広く報道された。山鹿に持ち帰られた千人針は、松尾の自宅ではなく、菊池神社に永久貸与という形式が取られ、現在では神社の宝物館に松尾敬宇の他の遺品や菊池千本槍の刀身など菊池一族にまつわる展示物と共に公開されている。

千人針の特徴

ここで返還された千人針について考えてみたい。そもそも千人針は、自分で作ったり買ったりするものではなく、肉親が作って兵士に贈るものであり、戦争にまつわるモノの動きに非常に関連が深い。千人針とは、一般的に女たちが白い綿布に赤い糸で千個の縫い玉を作り、胴巻きの形にして、戦場に向かう肉親に持たせたものである。千人針の胴巻きは弾除けのまじないと考えられ、これを身につけていると弾丸に当たっても負傷をすることがないと信じられていた。縫い玉は一人の女性が一つしか作れず、さらに糸を切るときにははさみではなく糸きり歯を使うこととなっていた。例外は寅年生まれで、彼女らは自分の年齢の数だけ結び目を作ることができるので非常に重宝された。一般的な千人針は、千個の縫い玉が碁盤の目のように並んでいるものだが、模様や「武運長久」の文字を縫い玉で描いたものもある。模様には虎が選ばれることが多く、それは「虎が千里往って千里を還る」といわれているところから、遠くの戦場で戦っても、無事に家族のもとに生還するようにという気持ちが込められていた。松尾の千人針は碁盤目に縫い玉が作られ、それに五銭玉が縫い付けられていた。これは、「四銭(死線)を超えるように」という語呂合わせによるものである⁴⁷⁾。渡邊一弘の論考によると、千人針は日清・日露戦争の時代に始まり、特に日中戦争、満州事変の頃から1944年くらいまでの間に非常に多くつくられた。(渡邊, 2008) 千人針は、戦争と女性のつながりを象徴するモノであり、そのモノを女性が出征する兵士に贈ることで意味が創出される。個々の縫い玉は、一人一人の女の手仕事で、糸を切る際に歯を使うことで、女たちの身体との直接的な接触があり、さらに胴巻きとして体に巻きつけることでこの接触はさらに強くなる。

なぜ、千人針が流行したかについてであるが、その起源が日清・日露戦争の頃であることに非常に深い関連があると考えられる。この二つの戦争は、日本が近代国家として、アジア大陸での権益拡大のために戦った近代戦である。日清戦争では24万人を出兵し、1万3千5百人あま

りが死亡している。（詳説日本史図録編集委員会，2008：224）⁴⁸⁾ 日露戦争では派兵規模がさらに拡大し、出兵兵士数は108万人で、戦死者が8万4千人、負傷者が14万3千人となった。（詳説日本史図録編集委員会，2008：230）日本を離れ、海外の戦地に出征して行った兵士たちは、近代兵器を使用する戦闘に投入されていた。そこでは、どこから飛んでくるかもしれない砲弾や銃弾に身をさらすことを意味した。さらに、これらの弾は強烈な破壊力を持ち、体に命中すると生命を失う危険性が非常に高い。このような戦場に夫や息子を送り出す女たちは、理性的に考えれば、布でできた千人針が威力のある弾から本当に身を守る効果があるとは信じなかったであろう。しかし、どこから襲ってくるかが予測できない危険性だからこそ、それから身を守る呪力を持ったモノがあると聞けば、それを手に入れて持たせたいと欲したにちがいない。また兵士たちも、女たちのその願いがわかるからこそ、肌身につけたのであろう。江田島の海軍兵学校を卒業した当時の超エリート軍人であった松尾敬宇は、任官後も厳しい訓練を経て潜航艇乗員に選ばれ、特別攻撃隊員としてシドニー湾攻撃に参加したが、出撃の際には姉が贈ってくれた千人針を体に巻いていた。このことから、はたして実際の戦闘で効果があるかどうかという理屈では測れない、母親や妻や姉などの肉親の気持ちがこもったモノが、千人針であったといえる。そしてその気持ちとは、「無事に無傷で戻ってくるように」であり、「お国のために命を捧げよ」というものでは決してない。さらに千人針には、この家族の純粋な祈りに同感する千人もの女性の思いが凝縮していたといえる。

千人針との特徴は、日中戦争の頃から太平洋戦争中にかけて同じように出征兵士に贈られた寄せ書きの日の丸と比較すると非常にはっきりする。「武運長久」と大きく毛筆で書かれた旗には、出征する兵士の名前が大きく記され、日の丸の周りに多くの署名がされた。この署名は町会や隣組など居住地域の成員や、職場や学校など社会的集団の成員の名前である場合が多い。そして、国旗に記されたのは家の代表や世帯主の名前で、ほぼ例外なく男性名が記録されている⁴⁹⁾。日の丸は壮行会などの公的な場で皆の前で贈呈され、「武運長久」という文字からは、「勇ましく戦うこと」が願われ、勇敢に戦った結果の戦死もその意味合いに含まれていたと考えられる。反対に「祈無事生還」は、日の丸には決して書かれることのない言葉である。

対照的に、千人針は前述のように女性のみが作ることが出来るものであり、加えて縫い玉を作る千人の女性たちは無名の存在である。そして千人針に、勇壮ではあるが生命力が強く帰巢本能があると信じられていた虎の姿を描くことからわかるように、怪我をすることなく、無事に家族のもとに生還するようにという祈りが込められていた。この思いを込めて作ったからこそ呪力があると信じられたのであろう。そしてその願いは、母親や妻や姉という女の近親者だけに限らず、同じような思いの不特定多数の女性も感じていたことであり、それらの協力を得て作りあげられたモノである。千人針は、肌着として身につけることによって効力を発すると考えられ、決して外から見えるように着用されることはなかった。さらに、身内の間で受け

渡されるモノであるため、人前での贈呈式は行われない。このように千人針は、肉親を兵士として故郷から遠く離れた危険な戦場へ送る際に、女性たちが見えない集団として、無事生還の願いを込めて密やかに持たせたモノであった。

考察とまとめ

本稿では1942年に起った日本軍特殊潜航艇によるシドニー湾攻撃の結果、オーストラリアに残された遺物が戦争中と戦後にどのような動きをしたかを中心に考察してきた。その動きをまとめると次のようになる。まず乗員の遺灰は、海軍葬の後、交換船でオーストラリアから日本に返還された。松尾の軍刀は、潜航艇回収時に行方不明になったが、攻撃直後に豪軍によって回収された中馬の軍刀と混同された。戦時中は、日本側の要求にもかかわらず、中馬の軍刀は返還されなかった。戦後に戦争記念館で展示をされていた松尾の千人針は、1968年に訪豪した松尾の母親に返還されている。

これらの遺物の動きがいったい何を意味するのかを考察したい。戦争の遺物に関する研究として、英国の文化人類学者のサイモン・ハリソンの論文である“War Mementos and the souls of missing soldiers: returning effect of the battlefield dead” (2008) が非常に示唆に富む。この論文は、太平洋戦争中に戦死した日本兵の所持品だった日の丸などを記念品として持ち帰った元連合軍兵士やその家族が、半世紀以上もたってから本来の持ち主である日本兵の遺族にそれを返還するという行為を取り上げ、1987年から2007年まで、米国、豪州、英国や、日本の英字新聞で報道された事例を検証している。ハリソンはマルセル・モースの『贈与論』に言及しながら、文化人類学的見地からモノ（遺物）の動きを考察した。モースはこの著書において、社会集団同士が、互酬性の原則に則って贈り物を交換したり、互いに供応することで、集団間に平和な関係を築き上げようとする主張した。特に、敵同士、あるいは敵になる可能性のある集団同士が、互いに贈り物を交換をすることで、ある集団は相手集団に道義的な貸しや負い目を発生させる。相手集団もその借りや負い目を解消するためにモノを贈る事が互酬性を生み出し、結果的に集団は「戦争、孤立、停滞」という状況を「同盟、贈与の交換、商業」という状態に変化させる。このように、モースは互酬性を持つ交換は、戦争状態を平和な状態に変化させる効果があると論じた。(Mauss, 1969: 80)

ハリソンは、連合軍兵が無断で入手したモノを、本来の持ち主である日本人兵士あるいはその家族に戻すためのモノの動きを、restitutive giving（原状回復的贈与）とし、通常の贈与とは異なると主張した。つまり、集団の関係の強化によって平和や和解の構築を目的とする互酬的な贈与ではなく、原状回復的贈与は集団の独立性や境界を確認する役割を持っていると主張した。遺物はもともと日本兵の所持品であるため、死体からそれを取った米兵には、一種のわだ

かまりが残っており、モノを所有者の遺族に返還することで、このわだかまりを解消し、受け取った側も、それまで長い間失われていたモノが戻ってきたことで、ようやく原状に戻ったという安堵感を覚える。そして、このやり取りが完了した後は、双方とも「借り」あるいは「喪失」の気持ちが解消され、ようやく独立した集団となり、決してこの遺物のやり取りを通して、さらなる関係が築かれるわけではないと論じた。

太平洋戦争が終わったあと 40 年から 60 年後の遺物の動きをとらえたハリソンの研究に対して、本稿では戦争中、そして戦後 20 年あまりたった 1968 年までの遺物の動きを追った。まず、国交が断絶状態にあった戦争中に、オーストラリアが日本人乗員のために海軍葬を行い、遺灰を日本に返還したのには、豪捕虜の扱いに配慮を期待するという日本との平和的な交渉の意図が含まれていたことを指摘した。遺灰の返還は確かに「原状復帰的な贈与」であるが、敵国の軍人を特別に扱うことで日本側に貸しを作り、その見返りとして自国兵に対しての配慮を期待するという互酬性の原則に則ったものであるといえる。しかし、日本側は、吉川英治の主張に見られるように、返還を相手側の好意と認めることを拒否し、別の解釈を示すことで、「借り」あるいは「負い目」の発生を否定した。ここで明らかになるのは、モノをある集団から別の集団に移すという行為の持つ多義性である。オーストラリアの意図を日本は共有することではなく、あえて別の解釈を提示することで「負い目」はないと主張し、互酬性を持った交換関係を拒否したのだった。

一方、松尾敬宇の千人針の返還も「原状復帰的な贈与」であるが、戦争終了後に実施されたことで、オーストラリアから日本への贈与であるとの理解を共有し、日本も感謝の念を表している。1960 年代初頭から始まった日豪間の人の往来（山下、松本、マグラス）とそれにとまなう各種のモノの動き（本の寄贈、手紙や写真の交換、日本酒の委託）が、松尾まつ枝の訪豪と千人針の返還という形で結実したと言える。ここで見られる人の往来とモノの交換は、日豪関係の改善に影響をあたえ、平和な国際関係の構築に貢献しており、モースの主張するように、モノの交換を通して、集団間に平和な関係を作られることの実証といえる。しかしここでも、人とモノの動き、あるいは交換という行為の多義性が浮かびあがる。つまり、松尾の地元の人々は、遺物を肉親に一目見せたい、あるいは肉親の手に戻したいという動機でまつ枝の訪豪を支援したが、それに関与した日豪の政府関係者や組織関係は、個人的な感情だけではなく、日豪間の友好関係の向上や促進という別の意味を訪問や千人針の返還に付与していた。

さらに千人針の返還は、オーストラリアの元敵国民である日本人や日本人遺族への配慮だけで決定されたのではなく、最初の返還拒否に対する豪国内の批判を抑えるための政治的判断であったことも忘れてはならない。このように、遺物の返還は相手の集団に対する平和を目的とした行為であるだけでなく、自身の集団内の安定をも意図した場合がある。

松尾敬宇の軍刀は行方不明になり、中馬兼四の軍刀は、河相公使の要求にもかかわらず、返

還されることがなく、潜航艇の船体と同じように、戦争中に豪国内で一般公開され、現在でもオーストラリアで展示されている。つまりここで指摘したいのは、軍刀や潜航艇など自国民にとって戦利品としての価値があると考えられるモノは手元にとどめ、相手側からの要求があってもオーストラリアは返還しなかったことである。一方、戦争中の日本では、戻されなかった理由を松尾自彊が主張したように、軍刀に行為主体性が与えられ、軍刀の意図的判断で日本の勝利を助けるためにあえてオーストラリアに留まったとされた。松尾が携えた刀は、菊池千本槍にまつわるモノであったため、菊池精神がその中に内在化され、行動主体を持つようになったと考えられた。このような解釈は、オーストラリアによる返還拒否という事実を卑小化し、敵国の決定ではなく、菊池の軍刀の意思であると解釈することで、主体性をオーストラリアから日本に移動したのである。

ハリソンは「原状回復的贈与」は、集団間の境界性を確認する役割があると主張したが、確かに、松尾まつ枝が再び訪豪することはなく、通訳として同行した松本もその後の日豪交流の活動には登場しない。しかし、特殊潜航艇にまつわる遺物の動きの持つ多義性は、いろいろな人々や団体によって各自の目的に沿って解釈され語られてきた。この多義性が、当初の当事者以外の人々や団体によって再解釈される余地をもたらしたといえる。千人針の返還後、両国間の関係にいろいろな発展と動きがあった。日本からは、特殊潜航艇の元乗員で組織する特潜会や熊本県の地元の団体が、乗員の慰霊を目的とした訪豪を長年続け、その場合は現地では豪海軍が受け入れ役となっている。山鹿市とクーマ市（キャンベラから約100キロ南にある地方小都市）は姉妹都市関係を結び、毎年中高校生が交換留学生としてそれぞれの町でホームステイをしている。オーストラリアからの働きかけとしては、元連邦政府首相のボブ・ホーク氏が主宰するホーク基金は、山鹿からシドニーへ高校生の短期留学奨学金を出したり、千本のジャカラダの苗を山鹿地域に日豪親善のシンボルとして寄贈している。このような交流があるたびに言及されるのが、松尾敬宇のシドニー湾攻撃、その後の松尾まつ枝の訪豪と豪側の暖かい歓迎、そして千人針の返還である。この展開は、太平洋戦争で敵として戦った両国の歴史的事実を、現在の日豪の友好的関係に非常に巧みにつなげる物語を作り出す。2002年5月にオーストラリアを公式訪問した当時の小泉純一郎首相も、豪国会議事堂内で催された昼食会のスピーチで特殊潜航艇に関するこの一連の出来事に言及し、日豪のつながりの強さを強調して豪側にアピールした⁵⁰⁾。

本稿で論じた遺物の移動によってもたらされた関係は、「モノを贈与する」という互酬性を持った行為は、集団間に常に共通の理解が存在するとは限らず、行為自体の多義性によって、解釈に違いがあることがわかる。しかし、そこで発生したつながりは、それに関わる当事者や組織や関係の性格が変わっても、継続していき、完全に断絶することはなかったといえる。

注

筆者は2007年8月から2009年10月までオーストラリア戦争記念館内豪日研究プロジェクト(AJRP)にプロジェクト・マネージャーとして勤務し、日本軍特殊潜航艇のシドニー湾攻撃とその記憶に関するサイトを立ち上げた。本稿の執筆にあたり、AJRP勤務中に収集した資料も活用し、またサイトに記載した内容も引用している。AJRPに対する日本政府外務省、オーストラリア戦争記念館、日本大使館勤務の歴代の防衛駐在官の方々の協力と支援に感謝するとともに、Dr. Steven Bullard, Dr. Robert Nichols, Dr. Nigel Steel, Ms. Anne-Marie Conde, Prof. Hank Nelson, Dr. Vicki Lukerにも多くの教示をいただいた。また資料収集の際には、松尾敬宇のご遺族である松尾和年・和子ご夫妻と植田一雄氏より多大なご協力を得たことに心より感謝したい。なお本論考は2009年2月から5月まで筆者が人文科学研究所外国人研究員として調査・研究をした内容を含んでいる。研究所の皆様、特に田中雅一教授のサポートに感謝の念を表したい。

- 1) 戦争では、一般市民も空襲などに巻き込まれて多数死亡するが、この論考では兵士の死に焦点をあてて論じたい。
- 2) オーストラリア戦争記念館では、現在でも学芸員や職員は所蔵資料を「relic」(遺物)と一般的に呼ぶが、これは記念館の創立に深くかかわった軍事史研究家のC. E. W. ビーンの主張による。(McKernan, 1991: 44)
- 3) 戦争と死者の慰霊に関しての先行研究は膨大な数に上るが、西村明が『戦後日本と戦争死者慰霊』(6-10頁)の中で研究の動向についてまとめている。
- 4) 厚生労働省の2008年までの遺骨収集事業実績に関しては、厚生労働省「政策レポート 海外戦没者の遺骨収集事業等について」を次のサイトを参照のこと。(http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2009/01/06.html) 栗津によると沖縄では1955年から継続的に遺骨収集が続けられており、2007年の集骨数は96となっている。(栗津, 2010: 14) 2010年8月10日には阿久津内閣総理大臣補佐官をリーダーとする「硫黄島における遺骨収集のための特命チーム」が結成され、第一回会合が首相官邸で開催されている。(http://www.kantei.go.jp/jp/singi/ioutou/dail/gijisidai.html)
- 5) 東部ニューギニアのココダ道を中心として長年遺骨の収集に献身的に関わってきた西村幸吉氏に関しては、Charles Happellが*The Bone Man of Kokoda* (邦題『ココダの約束』)で紹介している。
- 6) 拙稿「パネルディスカッション『戦争展示』」及び「シドニー湾攻撃特殊潜航艇の展示とその変遷」を参照。
- 7) 西村明(2008a, 2008b)及び栗津賢太(2010)を参照。
- 8) 日豪の太平洋戦争に関しては、鎌田真弓編『日本とオーストラリアの太平洋戦争』に収録されている拙章「日本とオーストラリアの太平洋戦争」を参照のこと。
- 9) 日本軍による連合軍捕虜の取り扱いに関して収集した情報が統一性にかけたため、豪政府は総合的な判断を下すのが困難だった。1941年12月の香港占領の際に、日本軍が病院を攻撃し英国人看護婦を含む職員を殺害したことはすでにオーストラリアで知られていた。1942年1月のラバウル陥落後、日本軍による捕獲を逃れて脱出した豪兵が、4月頃から豪北部に帰着して状況報告を始め、その内容が豪国内で新聞報道されたが、それにはラバウル近郊のトール・プランテーションで2月に起こった日本軍による約130名の豪捕虜虐殺の日撃情報も含まれていた。一方、4月下旬には、ラバウルで捕虜になったオーストラリア将兵が家族に宛てて書いた手紙を日本海軍機がポートモレスビー上空まで運び、オーストラリア側に渡すため郵便袋に詰めて投下させた

という出来事もあった。(Sugahara, 2011)

- 10) 特殊潜航艇の性能及び開発の歴史については、奥本剛が『図説帝国海軍特殊潜航艇全史』で詳しく解説している。
- 11) 伴艇は引揚げられることなく、海底に沈んだまま海洋遺跡として保存することをオーストラリア連邦政府の環境・歴史遺産・芸術省と NSW 州政府の環境省が決定した。伴艇に関しては、詳細な調査報告書が公表されている。(http://www.heritage.nsw.gov.au/docs/M24_wreck_report_Dec2007.pdf)
- 12) シドニー・モーニング・ヘラルド紙、1942 年 6 月 1 日-4 日の紙面を参照。
- 13) オーストラリア戦争記念館が現在所有している資料の中にも、一度は艇内から無断で持ち出されたが、その後戦争記念館に寄贈されたものもいくつかある。2008 年 6 月には、特殊潜航艇の舵が一般競売に出されて、話題を集めた。
- 14) 特殊潜航艇の展示の変遷については、鎌田真弓編『日本とオーストラリアの太平洋戦争』に収録されている拙章「日本軍特殊潜航艇の展示とその変遷」に詳しく記述している。
- 15) パースタル氏の娘のバーバラ・クック夫人より 2008 年 8 月 7 日に入手した情報。叔母のクック夫人を紹介してくださったヒュー・デフエランティ氏（ニューイングランド大学）に感謝する。
- 16) この録音はオーストラリア放送協会（ABC）のアーカイブスに保存されているが、次のサイトで ABC のナレーションの筆記録を読み実況放送を聴くことができる。(http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/pages/NT0001203A?openDocument) 1951 年に実況放送のナレーターを務めた ABC のディレクターのフレッド・シンプソンがこの録音盤を日本に持って行き、日本語ナレーションが加えられたものが作成された。
- 17) 遺体の扱いに関して、豪海軍から火葬にするのは日本の風習にかなっているかとの問い合わせが、メルボルンで軟禁中だった河相達夫日本公使にあった。(河相達夫, 1942)
- 18) 他の唯一の例としては、第一次世界大戦中にレッド・バロン（赤い男爵）と呼ばれて、連合軍からも畏敬されたドイツ軍の撃墜王マンフリート・フォン・リヒトフォーヘン大尉が 1918 年 4 月に連合軍によって撃ち落された後、連合軍によって軍による正式葬儀が挙行され埋葬されている。
- 19) これらの団体は、オーストラリア出身者協会（Australian Natives Association）や鉄鋼労働者組合などで、前者の代表者、H. R. レディングは、潜航艇の攻撃によって自軍の水兵たちが死亡したにもかかわらず海軍葬を決定したとミュアヘッドー グールド少将を非難した。ヘラルド紙 1942 年 6 月 11 日付及びシドニー・モンニング・ヘラルド紙 1942 年 6 月 9 日付を参照。
- 20) シドニー・モーニング・ヘラルド紙 1942 年 6 月 10 日付。
- 21) ミュアヘッドー グールド少将の放送原稿はニュー・サウス・ウェールズ州立図書館内の Mitchell Library に保存されている。(ML Aw 102/1)
- 22) 交換船の運行に関しては鶴見俊介他著『日米交換船』が詳しい。
- 23) 海軍葬実況放送録音とナレーションは次のサイトを参照のこと。http://ajrp.awm.gov.au/AJRP/AJRP2.nsf/pages/NT0001203A?openDocument
- 24) ミュアヘッドー グールド少将の放送原稿の抜粋は次のサイトを参照のこと。http://ajrp.awm.gov.au/AJRP/AJRP2.nsf/pages/NT0001204A?openDocument
- 25) オーストラリア戦争記念館戦史部門の歴史研究専門職員及び学芸員、そしてオーストラリア国立大学のハンク・ネルソン名誉教授と討議した。
- 26) オーストラリアによる日本軍人の遺灰の返還の試みは 1943 年 8 月にもあった。ニューギニア

で戦死した日本兵の遺灰 50 人分をラエ上空で日本軍に投下させる計画だったが、遺灰を積んだ米軍飛行機が墜落し、実現しなかった。（Wurth, 2008: 294-297）この出来事についてご教示いただいた坂口春海氏に感謝する。

- 27) 吉川英治「仰ぎみたり神武の士魂」『読売報知』1942 年 10 月 10 日付。この資料は松尾家所有のものを見せていただいた。松尾和年氏に感謝する。
- 28) 情報担当部門から日本が非常に感謝していると報告を受けたとミュアヘッドーグールド少将がニュー・サウス・ウェールズ州立図書館の館長に手紙で記している。しかし報告では吉川英治の名前を A. G. Oshigawa と記録していることから、おそらくラジオ放送を傍受して得た情報と思われるが、オーストラリア側の担当者は、当時すでに『宮本武蔵』などの作品を通して国民的作家として知られていた吉川の名声を知らず、日本語理解力にも限界があったのではないかと推察される。
- 29) たとえば、郡山敦著『第二次特別攻撃隊』（1943 年）や海軍省黒潮会編『決死潜航十勇士』（1943 年）、宗教問題研究所編『第二次特別攻撃隊 十勇士の生立ち』（1945 年）などがあることを奥本剛氏に教示いただいたことを感謝する。さらに松尾敬宇の伝記としては山口白陽著『潔淨記』（1944 年）がある。
- 30) 『熊本県菊池精神発揚児童教本 昭和十八年四月』収録松尾自彊著「神霊」50-56 ページ。この原本の閲覧を許可してくださった松尾和年氏に感謝する。
- 31) 菊池神社ホームページ「菊池一族の歴史」による。（<http://xnbtw921c.net/archives/category/%E8%8F%8A%E6%B1%A0%E4%B8%80%E6%97%8F%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2/>）
- 32) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02032803100, 「(在豪) シドニー特別攻撃隊員遺骨引取関係/1」(外務省外交史料館)
- 33) 菊池一族の皇室への忠誠を記念して、1878 年に菊池神社が別格官幣社となっている。
- 34) 掲載新聞名及び掲載日不明であるが、記事の内容から 1942 年 10 月 8 日くらいに掲載されたものと推察できる。この記事は松尾家が保存している新聞記事コレクション所蔵。
- 35) 真珠湾攻撃に参加した特殊潜航艇の乗員に関しては、すでに松竹映画会社が『海軍』として映画化し、1943 年に封切りになっている。
- 36) 『菊池千本槍』のプリントの行方については、谷川建司氏（映画史研究家）ととちぎあきら氏（東京国立近代美術館フィルムセンター映画室長）にご教示いただいたことを感謝する。
- 37) 筆者は記念写真アルバムを山鹿市の松尾家を 2008 年 6 月に訪問した際に閲覧させていただき、写真撮影を許可していただいた。英文拙論（2009）で、この写真を紹介した。
- 38) マグラス館長夫妻の訪問を伝える熊本日日新聞は「“軍神の母”に朗報 館長が会いにくる」と見出しをつけて 1965 年 6 月 9 日付で報道した。
- 39) 1965 年 7 月 30 日付デイリー・テレグラフ紙
- 40) 1965 年 8 月 2 日付のデイリー・テレグラフ紙に掲載された Anthea Leach 夫人の手紙。
- 41) Walgett 在住の Mrs. P. Malakellis の戦争記念館館長への 1965 年 8 月 2 日付の手紙。（戦争記念館所蔵文書ファイル AWM/002/006 03 “Japanese Submarine sunk in Sydney Harbour”）
- 42) 鈴木九万から W. R. ランカスターへの 1968 年 3 月 15 日付の手紙。（戦争記念館所蔵文書ファイル AWM/002/006 03 “Japanese Submarine sunk in Sydney Harbour”）
- 43) Ned Herring から W. R. Lancaster への 1968 年 3 月 25 日付の手紙。（戦争記念館所蔵文書ファイル AWM/002/006 03 “Japanese Submarine sunk in Sydney Harbour”）
- 44) 豪海軍の発表がちょうどアンザック・デー（第一次大戦中のガリポリ海岸上陸作戦開始を記念

- した国民の祝日で4月25日。戦死者追悼式や退役軍人によるパレードがこの日に行われる)に重なったことを、タブロイド紙のサン紙が1968年4月25日付で批判しただけだった。
- 45) 1963年9月23日付シドニー・モーニング・ヘラルド紙。この記事の存在についてご教示いただいたスティーブ・ブラード氏(オーストラリア戦争記念館軍事史部)に感謝したい。
- 46) この見学の様子を記録した映像は戦争記念館に映像資料(AWM F10163)として保存されており、次のサイトで見ることができる。<http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/pages/NT00012012?openDocument>
- 47) 同様に、「九銭(苦戦)を超えるように」と、十銭玉を縫い付けることもあった。オーストラリア戦争記念館の特殊潜航艇展示キャビネットには、艇内から見つかったという十銭玉が展示されているが、どの乗員の所持品だったのかは不明である。
- 48) 戦死者のうち、ほとんどが赤痢、コレラ。腸チフス、脚気などの疾病に原因するものであった。
- 49) 筆者はオーストラリア戦争記念館で勤務をした際に数多くの寄せ書き入りの日の丸を見る機会があったが、署名の中に女性の名前を見つけることは本当に稀であった。
- 50) 小泉純一郎首相のスピーチの内容については、次のサイトを参照のこと。<http://ajrp.awm.gov.au/AJRP/AJRP2.nsf/pages/NT00011FFE?openDocument>

参考文献リスト

英語文献

- Happell, Charles. 2008 *The bone man of Kokoda*. Sydney: Macmillan.
- Harrison, Simon. 2008 "War mementos and the souls of missing soldiers: returning effects of the battlefield dead" in *Journal of the Royal Anthropological Institute* (N.S.) Vol. 14: 774-790.
- Harrison, Simon. 2009 "Correspondence: Reply to Mark Mosko" in *Journal of the Royal Anthropological Institute* (N.S.) Vol. 15: 855-856.
- Jenkins, David. 2002 *Hitting home: The Japanese attack on Sydney, 1948*. Milsons Point, NSW: Random House Australia.
- McKernan, Michael. 1991 *Here is their spirit: A history of the Australian War memorial, 1917-1990*. Canberra: Australian War Memorial.
- Mauss, Marcel. 1969 *The gift: Forms and functions of exchange in archaic societies*. London: Cohen & West Ltd.
- Mosko, Mark S. 2009 "Correspondence: Maussian mementos" in *Journal of the Royal Anthropological Institute* (N.S.) Vol. 15: 853-855.
- Nelson, Hank. 1985 *Prisoners of War: Australians under Nippon*. Crows Nest, NSW: ABC Enterprises.
- Sugahara, Kan. 2010 "Chivalry versus Bushidō" in *Wartime*, 52: 46-49.
- Tamura, Keiko. 2009 "Triumphant return in silence" in *Wartime*, 45: 46-49.
- Wurth, Bob. 2008 *1942: Australia's greatest peril*. Sydney: Macmillan.

日本語文献

- 天川晃 1996 『GHQ 日本占領史 (19) 演劇映画』日本図書センター。

戦争の遺物とその移動がもたらしたもの（田村）

- 栗津賢太 2004 「記憶の場の成立と変容——欧米における戦没者記念施設を中心に」国際宗教研究所編『新しい追悼施設は必要か』ぺりかん社。
- 栗津賢太 2010 「媒介される行為としての記憶——沖縄における遺骨収集の現代的展開」『宗教と社会』16: 3-31。
- 内海愛子 2005 『日本軍の捕虜政策』青木書店。
- 奥本剛 2005 『図説帝国海軍特殊潜航艇全史』学習研究社。
- 海軍省黒潮会編 1943 『決死潜航十勇士——第二次特別攻撃隊実記』改造社。
- 河相達夫 1942 「(在豪) シドニー特別攻撃隊員遺骨引取関係/1」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B02032803100 (外務省外交史料館)。
- 木下鉄二 1976 『軍神松尾中佐とその母』本渡諏訪神社社務所。
- 郡山敦 1943 『第二次特別攻撃隊』先生書店。
- 宗教問題研究所編輯 1945 『第二次特別攻撃隊——十勇士の生立ち』宗教問題研究所。
- 詳説日本史図録編集委員会編 2008 『山川詳説日本史図録(第2版)』山川出版社。
- 新谷尚紀 2009 『お葬式——死と慰霊の日本史』吉川弘文堂。
- 関沢まゆみ 2010 「『戦争と死』の記憶と語り——フランスの二つの事例より」関沢まゆみ編『戦争記憶論——忘却、変容そして継承』昭和堂。
- 田村恵子 2009 「パネルディスカッション『戦争展示』」『軍事史学』44: 4, 9-38。
- 田村恵子 2012 「日本とオーストラリアの太平洋戦争」鎌田真弓編『日本とオーストラリアの太平洋戦争』御茶ノ水書房。
- 田村恵子 2012 「日本軍特殊潜航艇の展示とその変遷」鎌田真弓編『日本とオーストラリアの太平洋戦争』御茶ノ水書房。
- 土屋康夫 2009 『和解の海——特殊潜航艇、シドニー湾攻撃を越えて』ゆいぽおと。
- 鶴見俊輔, 加藤典洋, 黒川創 2006 『日米交換船』新潮社。
- 波平恵美子 2004 『日本人の死のかたち——伝統儀礼から靖国まで』朝日新聞社。
- 西村明 2006 『戦後日本と戦争死者慰霊——シズメとフルイのダイナミズム』有志社。
- 西村明 2008a 「遺骨への想い、戦地への想い——戦死者と生存者たちの戦後」『国立歴史民俗博物館研究報告』147: 77-91。
- 西村明 2008b 「遺骨収集・戦地訪問と戦死者遺族——死者と生者の時——空間的隔たりに注目して」『昭和のくらし研究』6: 39-52。
- 秦郁彦 1998 『日本人捕虜——白村江からシベリア抑留まで(上)』原書房。
- チャールズ・ハベル 2009 『ココダの約束——遺骨収容に生涯をかけた男』ランダムハウス講談社。
- 松尾自彊 1943 「神霊」『熊本県菊池精神発揚児童教本 昭和十八年四月』熊本県。
- 三島由紀夫 1974 『行動学入門』文春文庫。
- 山口白陽 1944 『潔浄記』(2008年復刻版) 熊本県教育会鹿本郡支会。
- 山下武雄 1959 『南十字星』日世社。
- 山室建徳 2007 『軍神——近代日本が生んだ「英雄」たちの軌跡』中公新書。
- 渡邊一弘 2008 「千人針研究に向けての整理」『昭和のくらし研究』6: 53-71。

ウェブサイト

豪日研究プロジェクトホームページ

人 文 学 報

www.awm.gov.au/ajrp

豪日研究プロジェクト特殊潜航艇サイト

<http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/56805e86c83bd28ca256cfd0010cffa/bd273c64c0d01ad7ca2576120023607e?OpenDocument>

要 旨

戦争での兵士の死は一般人の死とは違った形で扱われ、さらに戦死者にまつわる「モノ」も、通常の死を迎えた者たちが残していったいわゆる「形見」とは違う扱いや意味づけがなされる場合が多い。戦死者が残していったモノは、「遺品」や「遺物」と呼ばれ、肉体が存在していた証拠の骨や灰も遺物に含まれる。本稿では太平洋戦争中の1942年にオーストラリアのシドニー湾を攻撃した日本軍特殊潜航艇にまつわる3点の日本軍人の遺物——乗員の遺灰、携えていたと思われる軍刀、そして身につけていた千人針の胴巻——に注目して、これらのモノが戦争中から戦後にかけての二国間をどう動いたかを記述し、それらの動きが日本とオーストラリアの両国でどのように意味づけられてきたかを考察する。遺物には歴史的・文化的な意味を日豪それぞれが付与したが、二国間の移動とそれにとまなう反応は、モノに付与された意味の対比性を明らかにする。また、意味づけが日本の中で国家レベルと個人や地域社会のレベルでどう違うのかも考察する。最後に、千人針というモノの持つジェンダー的特徴に焦点をあてて、女性と戦争のかかわりについても考察を加える。

遺物が移動した結果、集団の間には関係が成立するが、この関係を精査することで、「モノを贈与する」という互酬性を持った行為に対する解釈と意味づけが両方の集団で同一であるとは限らず、その行為は多義性を持っていることを指摘する。しかし同時に、その多義性がゆえに、発生したつながりは、直接の当事者や組織、あるいは関係の性格が変化しても、継続し完全に途絶することがなかったことをこの事例をとおして論じたい。

キーワード：戦死者、遺物、互酬性、オーストラリア、太平洋戦争

Abstract

The war dead are often treated differently from others who died in normal circumstances, and objects which had some association with the war dead are given different meaning. The objects which were left by the war dead are often called relics. Human remains, such as bones and ashes, are included in that category. This paper deals with three relics which were left in Australia after the Japanese midget submarine attack in Sydney Harbour in 1942, and traces their movements during and after the Pacific War between Australia and Japan. The objects were the ashes of the crew, a military sword which was thought to have been brought by a crew member, and a thousand stitches body belt worn by him. How the movements of those objects were interpreted historically and culturally in each country will be examined. The movements of the relics highlight the differences and similarities in the meanings and interpretations each country had attached to the objects. The significance of Japanese thousand stitches belts will be discussed in relation to war and gender as well.

The transfer of relics from one group (nation) to the other was regarded as gift-giving and created relationships between them. Through examining the acts of "gift giving" which are supposed to trigger reciprocity, the paper argues that acts of giving and receiving were interpreted differently in each group and generated multiple meanings. At the same time, due to this multiplicity, the relationship between the groups continued even though the personnel and organizations, and their characteristics, had shifted over time.

Keywords: war dead, relics, reciprocity, Australia, the Pacific War